

講演会（シンポジウム）を開催して

宮城学院女子大学 人文社会科学研究所長 田 中 和 夫

3月11日のあの時から、間もなく一年になろうとしている。日常の生活は平常に戻ってきているように見える。しかし、また一方、なお個人、それぞれ何か重いものを抱えているようでもある。あるいは、思い出したくないという人々がいるのも事実である。

本学人文社会科学研究所において、本年度の講演会のテーマについて論じていたとき、今年度は重いテーマながら、やはり3月11日の震災について取りあげようということに所員の意見が一致した。今も尚、各種マスコミ、各種団体等で取りあげられているので、我々が事新しく企画する必要もないのではないか、とも思われた。

しかし、それらの多くが、震災の悲惨さを軸として、主として日本の内側から見るものであった。本研究所の講演会では、そうしたものと別に、この大震災を日本の外側から見た場合、たとえば外国人の人々はどのように見ているのか、あるいは日本人であっても立場を外に置いて見た場合、あの震災から社会のどのようなことが見えてくるのか、などを中心のテーマとして振り返ってみようとしたものである。復興を考える場合、また今後襲ってくるかも知れない震災にどのように向かっていけばよいのか、などについて一視点を提供できればとの思いも込められている。

本研究所のお二人の外国籍の先生、J. E. モリス先生からは、外国人との支援活動の中から感じられた、世界へ発信すべき「日本の防災意識」についての提言がなされ、姚国利先生からは地震に伴って発生した原発事故、その事故による日中貿易への影響が語られている。また岩川亮先生からは世界の原発大国であるフランスから見た、事故当時の情况及び同国の原発事情が提示されている。田中史郎先生からは、震災を社会経済のシステムから捉える、というこれまでほとんどなされてこなかった観点からの提言がなされている。

それぞれ、上記のテーマについての重要でありながら、見落とされがちな提言がなされたと思われる。講演会後参会者から、活潑な質問も寄せられ、関心の高さが感じられた。

今ここに掲載されているのは、四人の報告者の発表原稿を基に、多少の資料の補いなどを行った上で、発表されたものである。

2012年1月15日